

あなた

ヒロシ

今の私に出来ることってなんだろう。あなたのために、私は何をすべきなんだろう。まだ少しだけ冷たさを感じる風が、カサカサを草木を揺らし私の髪もなびく。初老の男性にリードを繋がれて川辺を散歩していた犬が歩みを止めると、男性が持つリードがピンと張った。男性が後ろを振り返りリードを軽く引っ張ると犬は再び歩き出した。男性の反対方向からやってきた2人のおばさんが擦れ違いざまに軽く会釈をして犬にも何か一言話しかけた。

「おまたせ」

男性と2人組のおばさんが10m程離れた時、後ろからあなたの声が聞こえた。振り返った瞬間シャッと音がして「あ、またやられた」と思った。

「やったね」

あなたは言いながらカメラのモニターを見た。

「いい表情だよ、ほら」

モニターに映るわたしの顔。毎日鏡で見ている自分の顔は、あなたの切り取る空間ではまるで違って見える。

「ありがとう」

私は立ち上がり、あなたの肩に付いている花びらに気付いて、そっと摘んだ。

「帰ろうか」

確かにあなたの存在を感じているのに、あなたがここにいるとわかっているのに、わたしは時々不安になる。

パソコンに向かうあなたの背中が儚く見えて、そばに行ってしゃがみ込みあなたの膝に頭を乗せる。あなたは私の髪をそっと撫でた。あなたに触られたり抱きしめられるととても安心する。私というものが、収まるべき場所にストンと迷いなく収まっていくような気持ちになる。あなたと出会って、優しさに香りがあることを知った。

人は悲しみの分だけ優しくなれる、と聞いたことがある。だとしたら、あなたはどれだけの悲しみを背負ったのだろう。その悲しみを私も共有できたなら私はあなたに近づけるのだろうか。でも、もしかしたら共有した分だけあなたから優しさの香りが薄れてしまうのかもしれない。だったら私はどうすればいいんだろう。

ふとパソコンの画面を見ると、あなたの切り取った空間が小さくなって沢山並んでいた。

「これ、さっきの」

カーソルが動き右端にあった一枚の上で止まる。カチカチッ。大きく広がった一枚の写真。あなたが見た、私のいる世界。カメラのモニターではわからなかったけれど、私の少し後ろに犬を連れて歩く人が写っていた。

「犬だ」

ポツリと私の口から零れた。

「うん、散歩していたね」

あの場所で、私とあなたは同じ人を見ていた。同じ犬を見ていた。その記憶を今、共有して

いる。私たちは同じ世界にいるんだなと思った。

「コーヒーでも飲もうか」

私の体をそっと起こし立ち上がったあなたはキッチンへ行き食器棚からカチャカチャとカップを取り出した。その音がとても心地よく、目を閉じて聞いていた。

そういえば、今まで使っていたお揃いのコーヒーカップの片方が割れてしまった次の日、あなたは新しいペアのコップを買ってきた。

「これは僕が1人の時に使おう」

割れずに残っていたコーヒーカップを少しだけ奥にしまい、手前に新しい2つを並べた。

「やっぱりペアじゃなきゃね」

あなたは丁寧にガラス戸を閉めて、側にいた私にキスをした。

「はい、できたよ」

ペアのコップを手にしたあなたはコーヒーをズズッと飲みながら、左手に持ったカップを私に差し出した。

「わたしの、そっちよ」

「え？」

あなたは口元にあったカップをくるりと見て、油性ペンで書かれた「S」の文字を見つける。

「あ、本当だ。でももう飲んじゃったし」

失敗しちゃった、というような笑みを浮かべ左手のコップをそのまま私に差し出した。わたしも少し笑って「あなたのカップ」を受け取りそっと口にした。

私たち、同じ世界にいるんだね。

あなたの笑顔をみると、とても幸せになる。でも、あなたがいないうちにその笑顔を思い出すと、とてつもない切なさに襲われる。

あなたがいなくなったら、私はどうなってしまうんだろう。きっと泣いて、泣いて、泣いて、来る日も来る日も泣き続けて、私が私でいられなくなって、私もまたいなくなるのかもしれない。

私たち、同じ未来を見ているのかな？

今日はあなたがいるから、私は安心して眠ることができる。ピタリと頭をあなたの胸にくっつけて、あなたの鼓動を数えながら夢の入口をくぐる。

明日、きっとあなたはいつもの笑顔で「おはよう」と言ってくれる。

完